

横浜スカーフ

マルカの遠藤さんと

ヌイトさん

スカーフ・蚕のお話



[後編]

この対談は 2021 年 2 月 14 日にたけのまにておこなわれました。

文中の内藤正、内藤春、大山は対談に同席したスタッフです。

録音協力：小林篤茂（Sunshine of Your Love LLC.）

イラスト：nuito

写真・文字起こし・編集・デザイン：favoris inc.



[左]

**遠藤洋平** えんどう ようへい

大手アパレルでMDを経験した後、丸加にてリテール部門に携わりオリジナルブランド [the PORT by marca] を立ち上げる。

[右]

**nuito** むいと

横浜生まれ仙台育ち。幼少期より生き物全般を愛す。特に虫、鳥好き。2013年蚕に出会いその魅力に夢中になり、以後自宅にて毎年飼育。2020年たけのまインターンになったことがきっかけで「たけのま×かいこ」プロジェクト開始。たけのままでの糸繰り体験などを通して蚕の魅力を伝えている。布、紙、木、糸など素材にこだわらずさまざまなものづくりやワークショップも開催している。なにかが生まれる瞬間に立ち会うのが喜び。

## 4 スカーフはお母さん、おばあちゃんのもの？

**nuito** うちの母とかは、シルクに対する信頼がすごい厚くて、下着はシルクじゃないとか、すごい言われたんですよ。それはきっと、小さい頃真綿を巻いてもらったとか、そういう記憶からずっときてるのかな。あとは単純に気持ちいいとかがあると思うんですが。

**遠藤** 実際気持ちいいですからね。

**nuito** そうなんですよ。さっきのサスティナブルじゃないですけど、天然繊維なので、土にも還りますもんね。

**内藤正** ヌイトさん、持ってきたやつは関係あるんですか？

**nuito** これはうちの母方から送られてきた、唯一残っていた喪服なんですけど、この間内藤さんのお母さんからお話を聞いて思い出して。内藤さんのお母さんが写真をされてるんですけど、成人式とか写真を撮る時に昔の着物を着るのが流行っているというか、お母さんが着たとかそういうのを着たいという若い子が増えてきたというので、写真を撮る時に光を当てたりすると昔の着物はわかると、昔の絹なのかっていうのが全然違っておっしゃってたんです。光だけではなくて、形が決まるというか。ちょっとこっち動いてっていうのも動きやすかったり。それを聞いて思い出して。これはうちの大大おばあちゃんが織って、白い反物までして、これを作ったのは別の方だと思うんですけど、うちの母のために喪服に仕立ててくれたんだと思うんですが。だから絹自体は70年、80年前くらいの絹だと思うんです。ちゃんと保存をしてくれてたので、穴も開いてなくてそのままだったと思うんですが。着たことはないの、光の感じとかはまだわからないんですが、やっぱり綺麗ですよ。

**遠藤** 織ったっていうのがすごいですね。

**内藤正** どこから送られてきたんですか？

nuito 気仙沼です。技術を教えてもらったり、継ぐ人がいなかったので、終わってしまったんですけど。これがちょうど繭一個分の糸なんですけど、これ見ると、これを織るのにどれくらいの蚕が、と思ってしまう。全部を無駄にしないという気持ちがあって、いま昆虫食とかちょっと流行り始めてますけど、別に昆虫を食べたいわけじゃないんですけど、蚕も全てを使ってあげたいということで、蛹とかはよく長野とか東北の方、韓国の方でも揚げたり、佃煮とかにして食べられてるんですけど、あとは蚕の糞とかも、やはり桑を食べただけというので栄養価が高いんですよね、漢方としても使われていて、そういうところまで、全てを使っていきたいというのがあるって、今年はたけのまで育てていきたいというのがあって、たけのまで育った蚕でそこまでやりたい、という。

内藤正 いろいろやりたいですね。古道具の知り合いで、蚕仕事の古道具をたくさんもっている知り合いがいるんですが、遠藤さんは実際そういうのはあったりするんですか？

遠藤 シルクが織られた生地からがうちの仕事なんですよ、それにどういう色をつけるかとか、どういう形にするかとか、そっちの方に特化しているというか。

nuito 年間どのくらい新しいのを出すんですか？

遠藤 新しいデザインでいうと5とかそんなもんじゃないですか。お店に出してるのがだいたい250くらいで、その裏側に、1000柄くらい型を持つてるんですよ。

nuito なるほど。

遠藤 それをお店に入ってる商品と頭にインプットしながら、次どんな商品、柄をやるのかと、当然そこに新作が入って、そんな感じでものづくりしてます。

内藤春 海外に輸出してるものはあるんですか？

遠藤 それは今のところないです。お話しがあれば是非やりたいですね。

内藤春 喜ばれそうな気がします、横浜スカーフは。

遠藤 そうですね、今はコロナだからあれですけど、東京の隣なのに、インバウンド化率が低く、残念な状況にあります、横浜って。そういう下地ですが、うちのお店でいうと、良いときは20%くらいは海外のお客様によるお買物でした。日本より、海外の方のほうが、シルクであったりとか、スカーフであったりというものに対して馴染みが深いというか。さっき、昔流行りましたよっていう話をしたんですけど、その頃の物を買うということって、ファッションって、流行り廃りなんです。僕も前職の時なんかは入って驚愕だったんですけど、コレクションでアニマル柄出た、よし、全社あげてヒョウ柄やるぞ、みたいな(笑)。

nuito 衝撃ですね(笑)。

遠藤 いろんなテイストのブランドをちゃんと持ってる大手アパレルだったんだけど、ほんとに10年20年前ってそういう世界もありました。

nuito おもしろい。

遠藤 今ってブランドのテイストがあるからそこをはみ出さないようにやるというのがあるんだけどそんなことしなくても昔はそれこそ、テレビに出てる有名人の誰かが着たとか雑誌にでたみたいなことで、ほんとにバカスカ売れたんですよ。信じられないくらい売れた。今はそういう役割、ファッションはおしゃれでというの、もっと廉価に楽しめませうという方についていて、逆にいうとファッションをずっとやってきた人間からいうと、ファッション?というところはあるはあるけど、安いからバツとかじゃなくて、ファッションという捉え方が、スタイルになっているかどうか、というものによって変わってはいけるのでは。僕は13年前、27、8くらいにマルカに入りまして、その当時周りの若い女の子、同世代くらいの子に、スカーフ巻いてもらえないかなと、美しく綺麗じゃんと思ったんですけど、ほんとにことごとく、100人~300人みたいな世界なんですけど、お母さん、おばあちゃんがいっぱい持ってるとか、要は私のものじゃないっていうもので、それを言われた時にはどれだけ……。打たれ強くならなかつたです、それだけは。がっかりして。それこそハマトラ流行ったねみたいな話だったり、そういうことが根にあって、ちなみにどんな気分だったかという、『魔女の宅急便』

でキキが、おばあさんのかまどで一生懸命ニシンのパイを焼いて、途中雨が降ってきて、びっちょびちょに濡ながら届けたら、「おばあちゃんただわ……。あたしこのパイ嫌いなよね」って言われた時の、あのキキです。

nuito ずぶ濡れのね。

遠藤 もう、毎回。毎回ずぶ濡れ。でもそこまで思っていると、なんとかしたいなってなるじゃないですか。

内藤春 眠っているスカーフってすごいある？

遠藤 すごいですよね。たぶん日本の家のタンスに、高級ブランドのスカーフ、何万枚じゃかないレベルであると思いますよ、きっと。

nuito やっぱり捨てないですもんね。

遠藤 うん、そんな高くていいもの捨てないし。

大山 わたしも先日祖母のタンスから2枚拝借してきました、まさに。

遠藤 当時、洋行したら、帰ってきたときのお土産にスカーフ渡すみたいなの。

nuito そうですね、確かに。

遠藤 日本の90年代くらいの話になるんですけど、けっこうちゃんと地続きになってて、ちょっと前まで中国人が爆買いって流行ったじゃないですか、その爆買いを当時日本人がヨーロッパとかアメリカでしまくってたの。

nuito なるほど。

## 5 スカーフは簡単、たのしい。

遠藤 僕はスカーフを巻くのって、もともとできなかったんですよ。先生がいて、その先生がナタリーベルジュロンさん<sup>\*\*1</sup> というフランスはリヨン出身の方なんですけど、その方が若い頃に日本に興味を持って、語学留学で日本に来て、リヨンの第3大学ってところを出られて、就職しようって思った時に日本語がしゃべれるということとか、彼女の素養で、エルメスに入られて、19年間働いていて、日本に来てからは、日本橋の高島屋、銀座のメゾン、新宿の伊勢丹かな、パリから含めて19年働かれて退社をされた後、彼女はエルメスで働いてる中でスカーフは素敵なもので、巻き方を伝えるために本を出した、初めて彼女が出した本を僕は見て、これすごいと思ってコンタクトを取って、ちょうど公募のデザインコンペをやって、2回目のときに、1回目と同じような形でやるっていうだけだと、2回目はどうかしなきゃなんて思って、スカーフを売るか、場所借りてるし、もう一個なんかと思って、ナタリー先生にメールをして、そこではじめて会って、うちの会社だったリスカーフを気に入ってくれて、いらっしやっただお客様にスカーフの巻き方教室をやったら、12、3人いたんですけど、終わったら、先生、私に似合うスカーフはどれって言って、みんな買って行ったんですよ。それまでは、なんで売れないんだろうとか、なんで若い子持ってくれないんだろうとか、じゃあスカーフの形を変えればいじゃないとか色々考えていたんですけど、色抜いて、デニムじゃないですけど、ブリーチアウトしてみたとか、そういうのにいちちゃたりとかしてたんですけど、それを見たら、あ、僕らちゃんと伝えてないぞ、てなって、先生に改めてお願いをして、うちのお店で7年間、ほぼ毎月、スカーフの巻き方教室を開催していました。ただその先生は、一昨年、53歳だったんですけど、白血病になっちゃって、戻ってくるねって言ってたんですけど、逝ってしまわれて。ちょうど池江選手、あの方と同じタイミングで。

nuito そうなんですね。

遠藤 僕は毎月見ていたので、見よう見まねというのと、こういった性格ですっかり覚えちゃって、百貨店さんとかのポップアップでなんかやりませんか、出さずだけじゃなくて、じゃあやりましょうって、やっています。今はコロナであれですけど、高島屋さんとかでやると、婦人洋品売り場って一階の、中央エスカレー

ターのところなんですけど、後ろの方のエスカレーターの前くらいに立って、1回30分で2回くらいやるんですけど、だいたい毎回30人とか40人のご婦人に囲まれてっていうのを、毎回成果としてアウトプットする、みたいな。高島屋さんにとっても喜んでもらっています。

なんでかっていう話なんですけど、これは今日お伝えしたいなと思ったんですけど、みんな、スカーフは難しくてわからないとか、私のものじゃないとか、1歩目2歩目が、導入としてなくて。僕は逆に、そういう会でも言ってるんですけど、簡単で楽しいですよ。たとえば帽子なんかもそうじゃない、慣れてる人ってぜんぜん普通にやるけど、かぶったことない人がかぶると、額めっちゃでてるなとか、かぶりすぎててあやしいぞとか。スカーフもそういうもので、それこそ固結びさえできればほとんどの巻き方できちゃうというか。そこからもっと好きになって、もっと派手な巻き方とかあるんですけど、それは好きこそものの上手なれで、普通の方でも固結び程度でいくらでも巻けるので、頭の中で、わからない、難しい、だから買わないって言われるんですけど、簡単、楽しい、だから買ってしましょ、という話。というのが、やってきたなかで得たものなのかな。

nuito すごいわかりやすい。カンボジアの織物でクロマーって言って、現地という手ぬぐいみたいな織物があるんですね<sup>\*\*2</sup>、それは手ぬぐいよりちょっと大きいサイズなんですけど、朝お弁当を包んで、お父さんが持っていくんですよ、綿でできてるんですけど、お弁当が終わったら、それを巻いて川に入って水浴びをして、帰りはそれを巻いて帰るみたいな。だんだんぼろぼろになってきたら、繕ってお布団にしたりとかするんですけど、そうやって地域に密着した布があるんですね。そのアトリエが葉山にあって、毎年お手伝いに行くと、やはり同じことを言われるんですよ、巻き方がわからないっていうのをすごい言われて、それは綿なのでシルクとはちょっと違うんですけど、私は子供を育ててる時に、今は授乳ケープとか色々売ってるんですけど、おっぱいあげるときに隠すためにここだけを結んであげたりとか、1個2個結べばスリングになったりとか、素材によっては暑くならないので、子供にかけてもいいし、いろんなことを言ったら「そういうふうに使っていいんだ、ソファにかけるだけじゃないのね」と買ってくださる方がすごく多かったんですね。ファッションとはまた違うかもしれないんですが、自由度がすごい高いですよ、1枚のものっていう。

遠藤 そうですね。



nuito 頭に巻くでももちろんいいですし。それは、ちょっとレベルが高いかもしれないですけど。

遠藤 いや、高くないでしょう。

内藤正：ぜんぜんいいと思いますよ。固定概念みたいのがあって、例えば花瓶があって、スカーフを巻いてもいいわけじゃないですか、古道具とかも色々スタイリングとか空間作る時に全然違う用途で使っちゃうんで。そうするとそれを見た人が、あ、なるほどってなるんですね。僕はそれが普通。みなさんはけっこうイメージが決まっちゃってるから。

遠藤 ね、スカーフっていうと、ああ、制服のあのCAさんのあれでしょ、とか(笑)。

nuito あれがすごいイメージがね、すごい花のやつ(笑)。

遠藤 あとお母さん、おばあちゃんと。もうほんとね、色々言われましたよ。

nuito 香水の匂いができるようなイメージですよ。

遠藤 そういうことが何度となくあって、その中で毎回毎回、どうしたらいいんだろうとかっていうのが今言っているような話になっていて、僕自身もそこで考え方が変わったのかわかって思うんですけど、やっぱり2011年の地震ですよ、もう10年ちょうど経つくらいになるんだけどあのときに、携帯、とくにツイッター、情報がとりあえず欲しくて、どんどんどんどん便利になって、気がついたらテレビも見ないし、雑誌も買わないし、みたいな、ファッションでいったらけっこう真逆で。さっき言った通り全社あげてヒョウ柄みたいな世界が、だんだんだんだん変わって行って今は、例えば人の携帯借りてインスタグラムの検索をすると全然違う画面が出るじゃないですか、だから個人に合わせて、あなたこれ好きでしょと、そういうふうな情報の収集の中心が変わってきて、うちはずうどこの間、一生懸命ECを伸ばそうってやってる中で、今40代の男性が2名、30代の女性が1名、20代の新卒、全然買い方が違うんですよ、新卒の子。まず欲しいものがあたらInstagramで検索。それでだいたいたどり着いちゃう。だからグーグル検索、しない。その頃には疲れてます、みたいな(笑)。

nuito へえー。タグで探すってことですね。

遠藤 そう。逆にいうと、今回も、僕、引越したんですけど、買いたいのがあったんですよ、子供のベッドなんですけど、なんでもそうなんですけど、まずいいものを見て、そこからどこを妥協できるか、自分の懐事情もあるから、上からずっと見て行くんだけど、ここに出てこなかったら、買うっていう選択肢に入らないんだと。

nuito なるほど、そうですね。

遠藤 だって、下に行けばいくほど、目につかない。てことはアクセスしてもらえないわけでしょ。なにこれと。

nuito ほんとですね。

遠藤 だから、ほんとにいいものかどうかというのは、結局懐疑的に見てて、どうしよう。

nuito たしかに。

遠藤 でもそういう世の中なんです。その中で生き残っていかなきゃいけないし、そう考えると、やることいっぱいあるよねっていう風には思ってます。それこそインスタに上がってこないと他のスカーフ出てきて買われちゃうと。

nuito そうですね。

遠藤 最終的にやっぱり発信しないといけないんです。知られること、知っていただくこと、言いたいことをいうんじゃなくて、伝えることでどうやっていけるかというのがこれから先大事だと思うし。お客さんがそうやって買いたいものを見つける、探すっていうのは当然あるので。そこはECを一生懸命やるようになってから、目から鱗みたいな。

nuito 今ほとんど雑誌って買わなくなりましたもんね。昔は雑誌でしたよね。

遠藤 でもそのおかげで、小さくても生きていけるようになったんじゃないかな。雑誌とか、テレビのモデルだとか芸能人とかみんな好きな人に巻いてもらいました、バカ売れ、逆にいうとそれができなかつたら売れないというのがあったのが、みんな自分で探すようになったから、自分の身の回りに置くものだったり、着るものとかって自分で選んでるっていうふうになっていってると考えると、僕は僕らで引き続きやらなければいけないことはあると思うんですけど、さっき言った、お母さん、おばあちゃんみたいなことじゃなくて、わたしは欲しいって言って買ってくれる、なんとなくなんですけど、最近ちょっと若年層が増えたかなど。実際ECを見てるとうちのお客様は25から34と、35から44で半分くらい。当然ご年配の方になると携帯でものを買うとか見るっていうのがまだちょっとというのはあるんですけど、逆にいうと、20代がうちのECサイト見に来てるんだと、そういう感じ。違う数字が見えてくると、じゃあこういうアプローチしてみようとかでてくるのかなあと。

nuito いまちょっと流行ってますよね、さっきの着物の話じゃないですけど、おばあちゃんの着物を着るとか、お父さんの服着るとか、若い子に今流行ったりとかしてるので、その流れでスカーフももちろん入るでしょうし。それこそタンスを調べたらあった、みたいな。

内藤正 実際今、古着がぐるっとまわって、ぼくが思いっきり着てた時代のものとかがめっちゃ流行ってますから。

遠藤 私も2周くらいまわって、あまり変わらないんですけど、物持ちが決していい方ではないと思ってたんですけど、ちょうど学生くらいで着てたやつを今着てたりとか。

nuito わかります。

遠藤 小遣い削って買った服とか、捨てるに捨てられないでしょ。

nuito そうなんですよね、気づいたら20年前だったみたいなね。

内藤正 全体的に、去年とかレコードの売り上げがCDより良かったとか、うち

にもラジカセがあるけど、海外だとそれが普通になっちゃってる、CDは出さなくなってる。逆になってきて、若い子たちもそれが面白いってなってるんで。だからスカーフだったりとか、昔からあるものが、若い子たちがちゃんと見直してる、確認しに言ってる感じ、今。

遠藤 やっぱりきっかけ作って、興味を持ってもらって、見てもらいたいですし、使ってもらいたいし。

nuito そうですよ、若い子とか面白い使い方とかしそうですね、首に巻くものなの？くらいの感覚で使うかもしれないし。

遠藤 もう、新しい使い方は随時募集してます。どんどんやってください。でも、やっぱり自由だと言ってしまうと、みんなルールを欲しがる（笑）。

内藤正 そうなんですよ、なんか買ってきて、なんでもいって言われると困るやつ。もうちょっとください、みたいな。さっきヌイトさんが言った、蚕の卵だったり、今もこれ（繭の糸繰り体験）やってますけど、他の場所でもやりたいとか、例えば横浜スカーフさんの歴代のものがこの部屋に展示してる、リンクさせるような仕組みとか、そういうのもできたら面白いなと勝手に思ってます。

遠藤 はい。

内藤正 ヌイトさんともしゃべっていて、別にたけのままでしか糸繰りできないわけじゃないので、移動して、そういうのがこうなんだよ、とか。サンプルのある状態で、だからこれをやってるんだとか、実際、フランスのシルクとかいっぱいあるわけですよ、地球全体の話になって行くので、コロナもそうですけど、そうじゃなくていい方の打ち出し方をしてできたらいいなど。

nuito なんか、糸繰り体験はすごいリラックス作用があるみたいで、同じ作業をずーっとするんですよ、1000メートルくらい繰り出すのに、糸繰り機だとどれだけ急いでも20分は掛かるんですよ。そうすると、みんな不規則よりは一定でされる方が多くて、手を動かすだけでも、だんだん透けていく繭を見るだけでも安らぐ気持ちになるっていう効果があるみたいで、この間老人ホームのお手

伝いをしての方がきた時に、これおばあちゃんたちにやらせたって言うてくさって。おばあちゃんたちにはその当時の記憶が戻る方もいるかもしれないし、そこで違うお話聞けたりとか、そういう作用もあるかなっていうのと、この間はミュージシャンの方がいらっちゃって、音が面白い、乾燥してるのはカラカラって音がするんですけど、その音を撮りたい、そして蚕が桑を食む音も撮りたいってなので、そういうふうに変色なところからアプローチできる素材だなと。

内藤正 2階とかカラカラしてる音を録音して流そうとか、ちょっとずつ出していこうと。

nuito この間は雨の日がすごく良くて、たけのまは2階の天井を取ってるので、雨降るとすごい音するんですよ、蚕の部屋に行って、蚕を見ながらあの音を聞くと、すごい良かったです。そういうふうに、アートとか、音楽、いろんな、素材としてだけではなくて広がって、全部なんですよ。そうなる素材かな、という。すごい楽しみです。

内藤正 また、色々相談するかもしれないので。

遠藤 はい、ぜひ。よろしくお願いします。

## 6 スカーフ簡単巻き方講座

内藤春 今ヌイトさんにスカーフを巻いていただいてもよいですか？

遠藤 いいですよ、やりましょうか。二つ折りにしてね、上と下を固結びしてみましようか。ほんとにこんなもので完成になっちゃうんですけど、では、手を……。

大山 かわいい！

nuito こういうことですね。私これ、クロマーで、自転車乗る時にやります、日除けに。



一同　すごいかわいい。

遠藤　これは、ボレロね。あと、一応首にも巻いてみましょうか。

nuito　取れないんですね。

遠藤　取れないです。あと、スカーフって旅慣れてる方は、今言ったような使い方、飛行機とか新幹線は空調すごいので、つけちゃうみたいなのもいるし。では、先生っぽくいきましょうか。

nuito　手品みたい。

遠藤　それもね、ポップアップあるあるですね。時間が過ぎると、前の売り場の販売員さんが来て、「手品ですか?」「違います」って。ちょっと前向いてもらっていいですか。

nuito かわいい！柄がいい感じですよ。ねじって結ぶっていうのが肝なんですね。

遠藤 最近頭にスカーフ巻いてる人多いと思うんですけど、そういう人はだいたいこの感じ。

nuito カッコいい、形がいい。

遠藤 柔らかくて気持ちいいでしょ？

nuito 柔らかい、ほんとに。

遠藤 あと、(スカーフが) 苦しいと言われるんですよ。でも、苦しいわけないでしょ (笑)。

nuito 苦しいわけじゃないです (笑)、全然。うちの母の時代とかは、マチコ巻きですよ。頭もかわいいですよ。

大山 この柄がすごいかわいい。

遠藤 それは、ビルディングフラッグって言って、船が出す旗あるじゃないですか、あの旗をビルに見立てて、ビルの上から俯瞰した感じの柄。

nuito なるほど、そう言われたら。

大山 もう欲しい。郵船博物館とかにあるあれですよ、いやー、もう欲しい。

nuito これはブランド名があるんですね？

遠藤 the PORT by marca っていう。

nuito っていうのがけっこうこういうカジュアルな感じ？

遠藤 そうですね。カラーと柄が、従来の、みなさんがイメージするスカーフ





ていうがあるので、デザインとか、ファッションとかプリントって、もっと広いでしょと、それを作ることによってスカーフのイメージを広げる役割として。PORTっていうと横浜港の話をみなさん言うんですけど、それも無いとは言わないんですけど、港って、ものが入って行って、ものが出てって、人が入ってって人が出てって、その中で残るものとか洗練されたりするというのが、このブランドではそういうことができたらいいなってということで。その二つの意味を掛け合わせた感じです。

**nuito** すごい軽やかですね。

**内藤正** すごいイメージ変わりました。

**nuito** ありがとうございます、楽しかったです。

### ★★1

ナタリー・ベルジュロンさんは1964年、フランス・リヨン生まれ。リヨン第3大学で日本語などの博士号を取得。1984年にエルメスに入社。パリ本店、日本橋高島屋や新宿伊勢丹のエルメス勤務を経て、2001年～2008年、メゾンエルメス銀座店のエキスパートとしてスカーフなどを販売。また、スカーフの結び方講師として、日本全国の店舗でセミナーを担当。2008年に独立し、講師として、スカーフの結び方、フランス語、フランス家庭料理教室などを開催している。著書に『スカーフ、ストール & マフラーアレンジ 140』（ソフトバンククリエイティブ）、『ナタリー・ベルジュロンのスカーフ STYLE BOOK』（双葉社）。

### ★★2

クロマー (krama) とは、カンボジアの伝統的な手織布のこと。クロマーの使い道は様々で、タオル・帽子やバッグになったり、もちろんスカーフとしても使用される。赤ちゃんを抱っこするスリングや、インテリアとしてテーブルクロスなどにも使える。クロマーの素材は主にコットン。ヌイトさんのご親戚がクロマーを取り扱っている葉山のお店はこちら。<http://krama.shop-pro.jp/>